

知的障害特別支援学校中学部におけるライフステージに即した 授業計画・手立ての研究

名古屋恒彦*、小山芳克・田村典子・熊谷知子・
熊谷佳展・中村昭彦・大谷幸恵・伊藤慎悟・齋藤貴子・阿部大輝**

*岩手大学教育学部，**岩手大学教育学部附属特別支援学校

(平成27年3月6日受理)

1 問題と目的

名古屋らは岩手大学教育学部附属特別支援学校（以下、「附属特別支援学校」）中学部における作業学習、働く活動をテーマにした生活単元学習の実践研究を通じて、中学部段階での職業教育のあり方を検討してきた（名古屋他，2008；2009；2010；2011；2012；2013；2014a；2014b）（以下、「附属先行研究」）。この過程で、中学部においても地域社会に根ざした働く活動は、生徒主体の学習の実現、青年らしい働く姿の実現とそのため能力の育成、地域との協働、持続可能な環境教育、多様な障害の生徒が取り組める活動の検討などの点から成果をあげていることを附属特別支援学校中学部における実践研究の経過に即して示してきた。

その過程で、近年、知的障害特別支援学校で関心の高まっているキャリア教育の考え方も呼応し、小学部から高等部に至る学習活動の連続性のありようの重要性も認識された（岩手大学教育学部附属特別支援学校，2013）。キャリア教育においては、ライフキャリア（菊地，2012）の観点から各ライフステージでの充実とつながりが課題となる。そこで、本研究では、知的障害特別支援学校における学習活動の連続性のありように示唆を得るため、小学部から接続し、高等部へと接続する中学部のライフステージに即した授業計画・支援の手立てを、附属特別支援学校中学部で実践される授業研究を通して検討する。

2 方法

本研究では、これまでの附属先行研究を継続し、以下の2つの方法を実施する。

(1) 授業研究会及び研究協議記録の整理

附属特別支援学校中学部において授業研究会（体育、音楽、1年生生活単元学習、2年生生活単元学習、3年生生活単元学習、計5件の研究授業）を行い、その協議記録を整理し、読み取り（太田，2007）により分析する。

研究協議が行われた学部研究会の概要は、以下である。

第1回：2014年7月24日（金）開催。対象授業「体育『逃走中をしよう（ドッジビー）』」。中学部全生徒を対象とした授業である。

第2回：2014年8月22日（金）開催。対象授業「音楽『音楽に親しもう』」。中学部全生徒を対象とした授業である。

第3回：2014年12月24日（水）開催。対象授業「中学部1年生生活単元学習」「中学部2年生生活単元学習」「中学部3年生生活単元学習」。

協議の記録の中から、当該授業に関わる発言記録を抜粋し、資料とする。この資料は、筆者全員で確認し、加除修正の上、確定した。考察においては、これら以外の記述で協議記録に残る記述（授業概要等）も必要に応じて活用する。

なお、本研究における名古屋を除く筆者は、研究実施年度における附属特別支援学校中学部全教員である。

(2) 他の特別支援学校における授業の視察・資料収集

ここでは、附属特別支援学校同様、生徒主体の授業を目標として実践している県外実践校1校を訪問し、授業視察と資料収集を実施し、筆者全員で資料を回覧し、情報を共有した。

3 結果と考察

(1) 授業研究会の実施及び研究協議記録の分析

3回の研究協議における各授業に関する発言を整理した資料は、表1～3の通りである。

3回の授業研究会が検討した5つの授業は、教科別の指導（体育1件、音楽1件）、領域・教科を合わせた指導（生活単元学習3件）と、異なるものであるが、協議の視点には、以下のような共通点が見出される。

①主体性にかかわる視点

生徒の活動に係って「意欲的に」（第1回）、「内側から自由に」（第2回）、「意欲的に」（第3回）、「いきいきと」（第3回）、「手応えを感じる」（第3回）、「楽しさ」（第3回）など、主体性を意味する記述が見出される。

このことは、授業における主体性という視点重視が共通していることを示している。一方、「準備段階から生徒が率先していけるような組み立て」（第1回）、「『自分から』『次々と』というより高い主体性を目標としたときには、期間が短いと考えられる。」（第3回）など、課題となる記述にも「率先して」「自分から」「次々と」といった主体性を意図したものが見られる。

②共同性に関わる視点

生徒の活動に係って「一体感」（第1回）、「教師や生徒の様子や視覚教材に自然と注目している」（第2回）、「周囲の生徒とかかわりながら」（第3回）、「みんなで一つのものを作り上げる」（第3回）など、仲間での目標の共有や活動の共同性を意味する記述が見出される。

③他学部との連続性

研究協議記録のうち、表1～3に示した各授業に

関する発言には、他学部との連続性を示唆するものは見出されなかった。これは授業研究の性格上、授業に関する直接の目標や手立ての検討が主となったためと考えられる。

表1～3に示した記述の他、協議記録の研究授業の計画等に関する記述には、「4月に高等部体育担当とも話しあった際、生涯スポーツとしてフライングディスクが浮上した」（第1回）とする記述がある。教科別の指導として各学部に設けられている体育では、他学部と題材に関して議論することで指導の連続性を図ることが期待できよう。

また学部内の取り組みではあるが、同じ時期に学級ごとに単元を計画・実施すること（第3回）は、それぞれの学級ごとのライフステージに即した取り組みを可能とする方法と見ることができる。

(2) 他の特別支援学校における授業の視察・資料収集

本研究では、県外実践校1校を訪問し、授業視察及び資料収集を行った。

小学部では遊びの指導、中学部及び高等部では、作業学習の授業視察を行い、指導案の提供を受けた。遊びの指導、作業学習、いずれも一定のテーマを設けて単元化した取り組みであった。単元化をすることで、見通しをもって意欲的に取り組める授業の方向性が指導案上も実際の授業においても見出された。また、遊びの指導、作業学習といった生活単元学習以外の指導の形態でも単元化が行われていることには、小学部から高等部にかけての指導法上の連続性を認めることができる。

4 総合考察

本研究では、中学部のライフステージに即した授業計画・支援の手立てを、附属特別支援学校中学部で実践される授業研究を通して検討した。

ライフステージを通じた授業は、県外実践校の視察でも明らかなように学部によって指導の形態が異なるなど多様である。

附属特別支援学校中学部での授業研究でも多様な指導の形態、題材が展開されていた。そのよう

な多様性の中で、研究協議記録からは「主体性」「共同性」といった共通の視点が授業研究上、見出された。これらの授業研究の視点を共通化することで、多様な指導の形態、題材であっても、一貫した授業づくりが可能となると考えられる。

ライフステージに即した授業計画・手立てを検討するにあたり、これらの共通の視点を有しておくことは、多様性が関連性や脈絡のないいわば「雑多性」という形で具体化されることを防ぐことができる。

今後の課題としては、その授業がライフステージに即しているかは、題材如何によるところが大きいことから、授業研究の段階でも題材をライフステージに即して適切であるかという、題材の質的検討を行っていくことも求められよう。

表1 第1回記録より

- ・ゲーム性が高く、意欲的に参加できる。
- ・エリア内で攻守の入れ替えがあることで、生徒の活動が保障でき、一体感を感じやすい。
- ・全員が参加するために内野と外野の環境づくりの改善。
- ・当てる、よける、ための部分練習を取り入れたゲームに至るまでの組み立ての改善。
- ・教師の誘導が必要な生徒の「参加している姿」をさらに具体的に。
- ・ねらいをさらに明確にすることで、教師の動きを統一する。
- ・準備段階から生徒が率先していけるような組み立て。

表2 第2回記録より

- ・即興的な演奏活動では、正誤を指摘することはしない。活動の始まりと終わりを示すことを大切に、生徒が表現することを否定しないことで、自分から自由に表現できるようにしている。それにより、どの生徒にもその子なりの表現が見られ、見ている方も楽しい授業になっている。
- ・表現について指摘しないことに合わせて、苦手な場面では退室を認めている。教師に一言

伝えて退室することで、「辛い」場面で「我慢」するのではなく、負担なく授業に参加している（退室した生徒は、苦手な場面が終わったところで入室している）。

- ・その場にいること、教師や生徒の様子や視覚教材に自然と注目している生徒が多い。
- ・「運命」の木琴演奏では、4つの音を右から順にたたけるように配置している。たたき方は、リズムに合わせて大きく2パターンの模範演奏があったが、練習から発表を見ると、「タタタターン」と、出だしを3回、伸ばすところは自由に！の様子が見られる。面白い。出だしは同じ音を3回ではあるが、リズムをつかみやすいのかも。同時に、伸ばすところは気持ちを解放しやすく、盛り上がる生徒は激しく連打したり、逆に1回で終わる生徒もいる。
- ・時代の流れに左右されるところではあるが、音楽的な「学び」を「楽しい」中にどのように取り入れていくかが課題。「楽しい」要素、楽しいと思える授業作りを大切にしていきたいが、それだけではなく指導としての「学び」について悩むところ。

表3 第3回記録より

- <中1>
- ・今年度の校外学習などから校外での活動を楽しみ、それに向けての学習に意欲的に参加する姿が見られた。また、縦割りグループで行った調理活動にいきいきと取り組む姿が見られこともあり、学級で繰り返し調理に取り組み、販売した売り上げで校外学習を計画することとした。
 - ・今回のテーマで計画した際、学級では初めての調理活動だったため、生徒の姿を完全にイメージしきれない部分もあり、指導計画や役割分担に難しさも感じた。今回の前に同じような期間やテーマでの実践があるとイメージしやすい。
 - ・単元期間は1週間と短いながらも保護者から

の注文が多く、3日間の薄焼き作りを一日を通して取り組んだ。今回の様子を考えると、薄焼きの焼き方を担当した生徒は、3日間で日々完成度を高め、生徒自身が手応えを感じる様子が見られたが、疲労度を考えると丁度良い期間であった。一方、生地作りやラベル貼り、袋詰め、洗い方を担当した2名の生徒にとっては、役割を理解して取り組もうとする姿は見られたものの、「自分から」「次々と」というより高い主体性を目標としたときには、期間が短いと考えられる。

- ・1時間内の活動については、生徒ができること、周囲の生徒とかかわりながら、役割を担っていく活動を複数設定することで、時間いっぱい取り組もうとする姿がたくさん見られた。
- ・個々の支援の最適化については、手順表など生徒が使いこなしたり、支援を改善したりしていくためには、1週間では短い。

<中2>

- ・縦割りグループで取り組んでいる「書く」「入力する」などの様々な力を発揮できる場を設定し、みんなで一つのものを作り上げることを目指した。
- ・校外よりも校内での活動により力を発揮できる生徒が多く、校外でのつまずきが気になるため、校外での活動も単元に計画し、楽しさを積み重ねる。
- ・壁新聞作りを通して、調べたり、まとめたりする活動を来年の修学旅行に向けても取り組んでみたい。
- ・できるように次々と声掛けをするのではなく、できたことを称賛した。
- ・初めての活動で、予想以上に生徒の活動が早く進んだ。毎日の生徒の様子を受けて改善していくとともに、今回初めて発見した生徒の姿も多く、今後活かしたい。
- ・他学級とは異なるテーマ。調べて、新聞を作っていくため、毎日新聞の状況が変わり、活動も繰り返しになりにくい。1週間の期間も

難しさを感じた。

- ・生徒の様子から「始めの会」「終わりの会」を簡略化した。振り返りや一人一人のがんばりへの称賛は大切にしたいことでもあり、生徒の実態から「自信をもって」「意欲を高めるために」必要な要素である。そのため、時間外も話題にしなが、称賛してきた。

<中3>

※全校授業研究会での協議対象のため、中学部研究協議記録はなし。

引用文献

- 1) 岩手大学教育学部附属特別支援学校 (2013) : 研究紀要22. 岩手大学教育学部附属特別支援学校, pp. 1-18, 105-109.
- 2) 菊地一文 (2012) : はじめに. 菊地一文編著 : 特別支援教育のためのキャリア教育ケースブック事例から学ぶキャリア教育の考え方. ジアース教育新社, pp. 3-5.
- 3) 名古屋恒彦・稲邊宣彦・田村英子・田淵健 (2008) : 知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第7号. pp. 175-182.
- 4) 名古屋恒彦, 稲邊宣彦, 田淵健, 大嶋美奈子 (2009) : 知的障害特別支援学校中学部における地域産業と連携した職業教育に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第8号. pp. 161-171.
- 5) 名古屋恒彦・名須川美智子・田淵健・田村英子・岩井雅俊 (2010) : 知的障害特別支援学校中学部における地域社会・産業と連携した職業教育に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第9号. pp. 85-96.
- 6) 名古屋恒彦・名須川美智子・中館崇裕・熊谷佳展・岩渕昌文・今井真実・田村英子・田淵健・竹野郁子・金丸温 (2011) : 知的障害特別支援学校中学部における地域の産業・専門家と連携した職業教育の研究. 岩手大学教育

学部附属教育実践総合センター研究紀要,
第10号. pp. 85-93.

- 7) 名古屋恒彦・田村英子・中館崇裕・熊谷佳展
・岩渕昌文・今井真実・田淵健・巴真希子・
中村昭彦・橋場哲 (2012) : 知的障害特別支
援学校中学部における地域と協働する職業教
育の研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総
合センター研究紀要, 第11号. pp. 87-97.
- 8) 名古屋恒彦・田村英子・中館崇裕・藤谷憲司
・石川則子・岩渕昌文・巴真希子・熊谷佳展
・中村昭彦・伊藤篤司・佐々木菜摘 (2013)
: 知的障害特別支援学校中学部における地域
と連携した持続可能な職業教育の研究. 岩手
大学教育学部附属教育実践総合センター研究
紀要, 第12号. pp. 281-289.
- 9) 名古屋恒彦・藤谷憲司・田村英子・田村典子
・小山芳克・岩渕昌文・熊谷佳展・中村昭彦
・大谷幸恵・北條真聖・細田聡志 (2014a) :
知的障害特別支援学校中学部における多様な
生徒の主体性を育む職業教育の研究. 岩手大
学教育学部附属教育実践総合センター研究紀
要, 第13号. pp. 235-244.
- 10) 名古屋恒彦・藤谷憲司・小山芳克・田村英子
・田村典子・阿部豪・熊谷佳展・中村昭彦・
大谷幸恵・細田聡志 (2014b) : 知的障害特別
支援学校中学部における目標・手立て・評価
に着目した職業教育の研究. 岩手大学教育学
部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論
文集, 第1巻. pp. 80-85.
- 11) 太田正己 (2007) : 特別支援教育の授業研究
法 ロマン・プロセス法詳説. 黎明書房, p. 2
06.